

## 水稻幼穂形成期におけるセジロウンカの被害解析

農業研究センター 農産園芸研究所 病虫部

### 研究のねらい

水稻生育初期におけるセジロウンカ飛来世代・第1世代幼虫期の要防除水準は、株当たり成虫5頭前後に設定され普及している。この第1世代期の防除で、実害はほぼ回避しているが、年によっては第1世代成虫の短翅型発現率が高く第2世代以降も高い密度が維持される場合がある。この第1世代成虫・第2世代幼虫による幼穂形成期前後の被害の実態及び防除要否の判断基準が不明確である。そのため幼穂形成期前後に成虫を放飼し、成虫の吸汁・産卵、幼虫の吸汁による被害を解析した。

### 研究の成果

1. 幼穂形成期のセジロウンカの増殖率は、1.0～2.2倍である。
2. 幼穂形成期前のセジロウンカの寄生は、収量構成要素に影響を与えない。しかし幼穂形成期の寄生は、密度が高い場合は穂数が減少し減収する。
3. 幼穂形成期に密度が高い場合は、玄米粒厚に影響を与え、1.8mm以下のクズ米率が高まり品質が低下する。
4. 試験結果から要防除水準を策定すると、幼穂形成期のセジロウンカは株当たり成虫20頭以上となる。
5. 普及地域

水稻普通期栽培地帯

### 普及上の留意点

- (1) 調査観察によって幼穂形成期にセジロウンカ成虫が、株当たり20頭以上寄生する可能性がある場合は防除を行う。
- (2) ほ場密度を粘着板で調査する場合は、下式で補正した真の寄生頭数を推定する必要がある。

$$\text{株当たり成虫数} = \text{粘着板による株当たり捕獲虫数} \times \frac{1}{\text{捕獲効率} (= 0.3)}$$

表 1 幼穂形成期のセジロウンカの加害が収量構成要素に与える影響

放飼時期	成虫放飼数	1 当り発生成幼虫数	穂数 / 株	1 穂当り 初数	登熟歩 合 %	千粒 重 g	精玄米重 g / 株	減収 率 %
移植40日後 (幼穂形成 期前)	0	0	22.1	87.3	73.6	19.6	27.5	0
	10	2.1	22.3	86.1	72.7	19.6	27.0	1.8
	20	2.2	23.7	82.0	73.1	19.6	27.1	1.5
	30	1.0	22.2	85.8	73.2	19.5	26.4	4.0
移植55日後 (幼穂形成 期前)	10	0.8	21.8	86.4	73.6	19.6	26.4	1.1
	20	1.0	22.8	85.3	71.8	19.4	27.1	1.5
	30	0.9	20.9	85.7	73.7	19.0	24.2	12.0

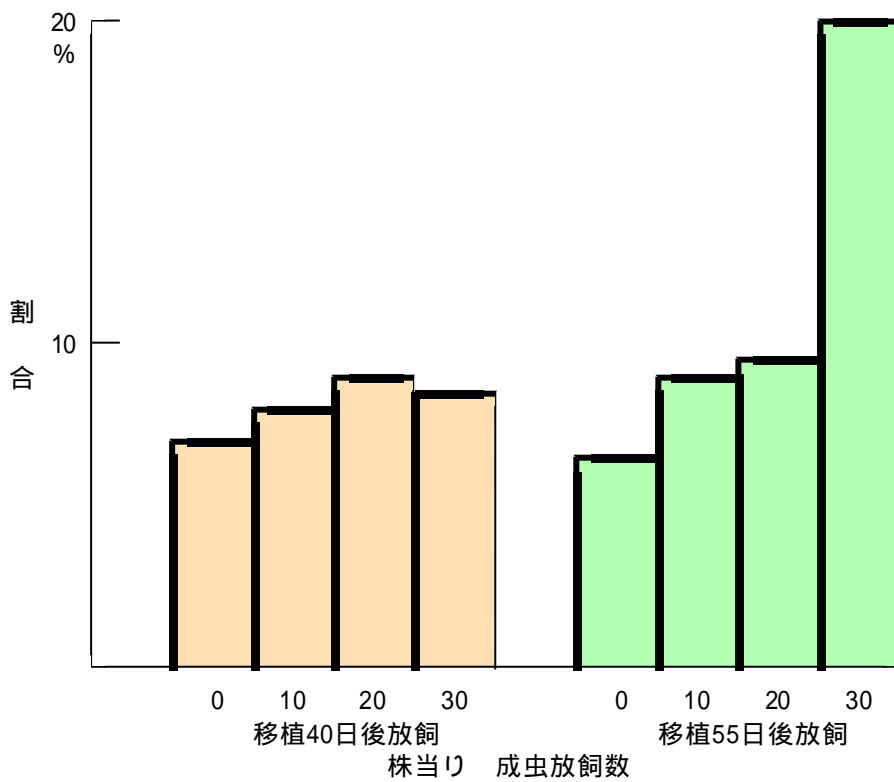


図 1 1.8mm 以下の玄米粒厚の割合